口演速記

明治大正落語集成

第七巻

口演速記

明治大正落語集成

第七巻

講談社

N.D.C. 910 516P 22cm

口演速記明治大正落語集成　第七巻

定価　二千五百円

昭和五十六年二月二十八日　第一刷発行

編　者　暉峻康隆　興津要　榎本滋民

発行者　野間惟道

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一
郵便番号一一二　振替　東京八―三九三〇
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

©講談社一九八一年
＊落丁本乱丁本はお取りかえいたします。

0393-441878-2253(0)（文芸局）　Printed in Japan

口演速記

明治大正落語集成　第七巻　目次

二段目……柳家小さん　七
五段目……橘家円蔵　一〇
万金丹……蝶花楼馬楽　二〇
山崎屋……柳家小せん　二八
立波……柳家小さん　三六
地見屋……柳家小三治　四四
血脈（けちみやく）……橘家円蔵　四九
猫の茶碗……橘家円喬　五四
鼻がほしい……三遊亭円右　六〇
三夫婦……橘家円喬　六五
子別れ……柳家小さん　七三
代脈……柳家小三治　八四
後の船徳……橘家円喬　九二
小いな……柳家小さん　一〇一
市助酒……柳家小さん　一〇九
京見物……柳家小三治　一一七
素人車……三遊亭円遊　一二六
黄金餅……橘家円蔵　一三三
あたま山の花見……橘家円蔵　一四三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

化物つかひ……金原亭馬生　一四八
言訳座頭……柳家小さん　一五六
饂飩屋（うどんや）……柳家つばめ　一六七
お直し……柳家小さん　一七三
首ッたけ……橘家円蔵　一八二
お目見え……金原亭馬生　一九〇
とろゝん……古今亭今輔　一九七
本膳……柳家小さん　二〇七
下女の恋……三遊亭小円朝　二一四
自動車の蒲団……三遊亭金馬　二二一
雷飛行……古今亭今輔　二二六
悔みの妙薬……柳家小さん　二三二
按摩の炬燵……柳家小さん　二三八
ちりとてちん……柳家つばめ　二四四
当ずつぽう……三遊亭円右　二五〇
駱駝（らくだ）の友達……柳家小さん　二五六
宝船……三遊亭円右　二七八
鰍沢（かぢかざは）……橘家円喬　二八四
義太夫がたり……春風亭柳枝　二八九

隅田の花見……蝶花楼馬楽 二九六
とんちき……柳家小せん 三〇三
居残り佐平次……柳家小せん 三一〇
高尾……柳家小せん 三二
大神宮……柳家小せん 三二六
突落し……柳家小せん 三三一
白銅……柳家小せん 三三六
五人廻し……柳家小せん 三四四
廓大学……柳家小せん 三五一
錦の袈裟……柳家小せん 三五五
明烏……柳家小せん 三六三
子別れ……柳家小せん 三七一
剃刀（かみそり）……橘家円蔵 三八七
浮れ三番（さんば）……三遊亭金馬 三九四
素人占ひ……金原亭馬生 四〇〇
猿丸太夫……柳家小さん 四一〇
碁どろ……柳家小さん 四一五
按摩の蚊帳……柳家小さん 四二一
唐茄子屋……柳家小さん 四三五

井戸の茶碗……柳家小さん　四三五
あた棒……柳家小さん　四四九

演目解説　暉峻康隆／興津要／榎本滋民……四五七
演者小伝　暉峻康隆……四九九

＊

演目索引……五〇一
演者別索引……五一〇

●本巻は「文芸倶楽部」の十六巻二号（明治四十三年一月）から、三十一巻一号（大正十四年一月）までに掲載された落語の中から選択した三十五話、大正二年の「講談倶楽部」から三話、単行本『新撰落語集』（大正八年刊）『廓ばなし小せん十八番』（大正八年刊）『三遊連柳連名人落語十八番』（大正四年刊）『柳家小さん十八番』（大正十三年刊）から選出の二十一話、計五十九話を収録する。

二段目

三代目柳家小さん口演
今村次郎速記

今回は義士外伝といふを御発行で、私にも何か其れに因んで落語を演るやうにとの御注文でやすが生憎私は忠臣蔵の落語を存じません。尤も義士伝の速記本を三味線を入れて高座へ担ぎ上げ、武士道鼓吹だなんといふ、大袈裟な名前で脅かし込む器用な芸人が沢山ありますが、真逆さうも参りません。といつて知らんでは済まないといふ余儀ない場合、拠ろなく二段目といふ、一夜漬のこじつけ物で御免を被むる事にいたしますが。川柳の穿ちに「銭湯でやるにたぎつた芸はなし」、当今では場末へ参りましても昔しのやうな不潔な湯屋は見当りません。皆な西洋風の立派な建物で、瀬戸物やなんかで万事綺麗に出来て居る。湯壺も俗にいふ温泉風。夏は肌を綺麗にして、冬は身体を温ためるといふアルブス鉱泉と段段聞くと湯の汚れが目立たない薬だてえますが、之はお客様の悪口かも知れません。浅草田圃には二十世紀浴場といふのがある。下谷の同朋町の湯屋では、椅子へ腰を掛けると其の圧力で自然と身体へ香水を吹掛けるといふ器械があります。尤も其側に注意がしてある。余り沢山掛ると毒になりますなどは余程洒落て居ります。湯屋の開業に楽隊を使ふといふ世の中で、都てに注意が行届き、綺麗事で明るいといふのでやすから、従がつて大きな声で唄を謳つて居る者もありません。低い調子で謡を演つて居る位ゐが関の山で、誠に静かで快い心持でやすが、困るのは自分の勝手にドシ〳〵水を埋て温くし過ぎたり、柘榴口で大きく陣取つて居る人をどうかして貰ひたい。当今の子供衆は御存じございませんが、明治廿年前後までの湯屋は風呂の前を柘榴口といつて、鳥居形の欄間へ金銀丹碧ゴテ〳〵と種〻彫刻がしてある。水滸伝の張順の水門破りや、熊若丸が鯉を差上げて居るのや、鉈で五人殺しをして居る……そんなのはありませんが、風呂の中は真暗でやすから、顔の知れないのを幸はひに、種々な怪しげな音曲を唸り出す。快い心持に温たまつて俗にいふ湯脂都々逸「先でー丸く出りや、なに此方でーも、角にやー出やせぬー窓の月……」「其れからどうしたんだー」跡を聞いて居る人がある。中には口三味線を弾いて囃かけて居る人があります。「ヤーツテトテトンシャン」。そんな三味線はありやしません。「ヤーツオイ」「嵯峨やおぼろの花盛り……」、鮨屋の出前持が常磐津を唸る。義太夫に凝て居る人は、指を一本〳〵洗つて居るさうで。「私のおいどの下谷より、沸りし湯玉がー煮え上がりどうまあ塡へてー、ヱヘヱヘ〳〵居らりやうか……」。それほどなら出れば宜いのでやす。気の軽い小僧さんは高い調子で「お前を待ち〳〵蚊帳の外ー蚊に喰はれ、七ツのお鐘が鳴るまでも……」「小僧湯が刎らア」

「こちや構やせぬ……」。洒落た小僧さんがあるもので。

又銭湯の浮世話を聞いて居ると自然商売が分るさうで

「其辺に軽石はありませんかね」

△「此所にあります」

○「イヤ之は掘出し物で……」

道具屋の主人。

甲「頭熱いやうだね」

頭「ナーニ立切つちまはウ……」

町内の仕事師でやす。

×「軍隊の旦那、加減はどうですね」

○「小隊しみる……」

真逆さうでもありません。当今は朝湯へ参つてもそんなに熱くはありません。又熱い湯は衛生に宜しくないさうでやすが、其頃は海老のやうな爺さん、真赤になつてて「アハハ日向水のやうだ……」なんて負惜しみを言つて居る人がある。一日に三度客に温いといはれると三助が解傭になるものださうで、でやすから却却埋めません。気休めに釣瓶だけ打付けて水は溜へ明けちまふ。「ソレ埋つたうめた、掻廻せ〳〵ヤーイア、宜い湯だ」暢気なもので……

芝居好きが湯屋の亭主のソックリ芝居の通りに普請をしまして、鼠木戸に海鼠壁、竹は櫓の葉の紋と唄の文句に残つて居るばかりで、外神田の歌舞伎座といふ化粧品屋さんが僅かに其の俤を写して居ります。万事大凝りで三助の三番叟が済むと、二立目から客を入れる。番台ぢやい。三助ぢやい。釜前ぢやい。木拾ひぢやい。エー糠袋はよしかな。流しはよしかな。按摩膏はよしかな。相撲取膏薬はよしかな。斯うなると眼の寄る処へ珠で、芝居好きの人は態〳〵遠方から入りに来る。何の事はない狂人の寄合で

甲「吉兵衛さん、感心には御精が出ますね」

乙「エヽ私なんざあ初日から千秋楽まで一生買切りさ」

甲「斯うやつて入ると自分が芝居を演つて居るやうなのは嬉しいね」

乙「嬉しいといやア今度の二丁目（旧猿若町の市村座）は大層な景気さね。何しろ忠臣蔵の通しで、珍らしく助高屋が若狭之介に廻つて彦三郎の本蔵といふに分も隙ない面白さア」

甲「さうかい。行きたいと思つて居るんだが、少し忙しいもんだから未だ行かないが、成程松切りは見物だらうね」

乙「見物だなんだつて両方がシックリ息が合つて居るから堪らないね。奥へ〳〵で小浪が引込まア。さし寄ればにじり寄つて、本蔵、今此若狭之介が言出す一言何に依らず畏こまり奉つると二言と返さぬ誓言聞かふ。ハヽツ是は〳〵改たまつたお言葉恐れ入り奉つた、デハござれども武士の誓言は。ならぬといふか。イヤさにあらず、先づ委細とつくと承はり。仔細を言はせた跡で意見か。イヤそれは。言葉を背くか。サア〳〵〳〵と繰上げになつて拠ころなく本蔵が金打をすらア」

丙「嘘ぢやアない、本蔵の金打だ……」

乙「交ツ返しちやア往けない。本蔵めが心底斯の通り、とゞめも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いたさず、他言もせぬ、先づ思召しの一通りお急なされずと本蔵めが胃の腑に落付くやうにとつくりと承はらん。ウム、一通り語つて聞かせん。と合方にならア」

甲「ヨウ〳〵助高屋ア」

乙「今度管領足利左兵衛督直義公、鶴ケ岡御造営ゆゑ此の鎌倉へ御下向、御馳走の役は塩冶判官某両人承はるところに、尊氏将軍の仰せにて、高の師直を御添人万事彼が下知に任せ、御馳走申上げよ、年輩と言ひ諸事物馴れたる侍と御意に随ひ勝ちに乗つて日頃の我儘十倍増し、都の諸武士並居る中若年の某がしを見込み、雑言過言、真二ツとは思へども、御上の仰せを憚かり堪忍の胸を押さへしは幾度か……」

丁「オ、泣いて居るぜ」

丙「気が狂つたんだ」

乙「明日は最早了簡ならず、御前にて恥面掻かせる武士の意地、其上にて討つて捨てる必らず止めるな、日頃某がしを短慮なりと奥を始め其方が意見、幾度か胸にとつくと合点なれど、無念重なる武士の性根、家の断絶奥が歎き、思はぬにてはなけれども、刀の役目弓矢の神への恐れ、戦場にて討死せずとも、師直一人討つて捨てれば天下の為め、家の恥辱には代へられぬ、必らず〳〵短気ゆゑに身を果す若狭之介、猪武者よ狼狽者と、世の人口を思ふゆゑ、汝にとつくと打明かす。と言はれて若しお前が本蔵ならどうするえ」

甲「どうするつて俺は知らねえ」

乙「知らねえ（で）済むかい、苟且にも大名の家が立つか潰れるかてえんだ、そんな不人情な奴たア交際ねえ」

甲「どうでも勝手にしねえな」

乙「馬鹿野郎、お前のやうな間抜けなら飛んでもない事だてえんだ。意見をするだらう。そんな事で利くかい、役者も豪いが本蔵は豪いや。マツ此通りに遊ばせと松を切つたぞ」

丙「売物にならねえ」

乙「縁日の植木ちやアねえやい、さうして置いて主人に気を持たせて、脇差の琫へ松脂を塗込んで、其晩夜中に師直の屋敷へ駈付けて賄賂を持つて行つたから、ホーラ見ろ、刀が抜けねえ、師直の機嫌は直る、無事に済んだのは皆な本蔵の働らきだ。真正に忠義の武士てえのは本蔵の事をいふんだ、由良之助の大石が豪いなんてえのは、物を知らねえ奴が言ふんだ。篦棒め敵を討つたつて家が潰れてどうするんだい。那れは散々ぱら女郎買をして金が失なる破れかぶれの自暴自棄で拠ころなく敵討をしたんだ」

甲「馬鹿野郎、罰当り、唐変木、チンケートウ、株ツ嚙り、何をいやアがるんだ、知らなきや教へてやらうか。本蔵なんてえ人間は土台無んだ、作者の腹から産出したんだぞ、間抜けめ。内蔵之助程の武士が日本開闢以来あるかい」

乙「そんな豪い武士なら何故家の断絶しないやうにしねえンだ」

甲「仕ねえも為るもあるかい、殿中刃傷の時にはな、大石は国家老だ。播州の赤穂に居て江戸の事が分るかい、赤穂の城の明渡しから敵討をする迄の艱難辛苦は生やさしい事ぢやアねえぞ。何の

為めに高輪の泉岳寺は繁昌するんだ、由良之助が出るから忠臣蔵なんだ、若狭之介と本蔵だけが芝居をして居て客が見物に来るかい。大箒棒め、手前のやうな物を知らねえ分らず家を井戸の中の鮒だてえんだ。さういへば手前の面は鮒に似て居らア、風呂の中の鮒め、鮒えゝ、鮒えゝ、鮒だ〳〵鮒野郎めえ」

乙「何をしやアがるんだダボ鱚め……」

遂〻摑み合ひが始まりました。今まで面白がつて見物して居た連中も打捨て置かれない。

丙「大変だ〳〵、遂〻松切りから喧嘩場になつちやつた、誰か梶川与惣兵衛の役に廻る者はねえかい」

丁「お前の顔はとぼけて居るから伴内に廻つたら宜らう」

丙「ナーニ番台に坐つてる奴が伴内面だ」

丁「何しろ危なくつて側へ寄れねえ、皆な抜身だからなア、ホーラ留桶で打合ひを始めた、軽石で面を擦つて居やアがらア。あぶねえ〳〵」

「側杖を喰つちやア大変だ、俺アお先へ御免を被むらう。オヤ〳〵着物が分らねえオイ〳〵番頭、俺の着物は何所だい」

番頭澄した顔で

番「二段目ぢやーい」

〔「文芸倶楽部」十六巻二号　明治43・1・15〕

五段目

四代目橘家円蔵口演

今村次郎速記

毎度お芝居の御噂が出まするが、此の御芝居位世の中に結構なものはございません、又役者の方でも役役に依て、種〻趣向を凝らして御客様を感動させる中に、アノ役者は愁ひが利くの利かないのと云ふ事を能く申しますが、成程泣かせる位世の中に難かしい者は無い。自然御客様の方が力を入れ、情に迫つて涙道を責め、涙を溢すといふ、芸が良くなければ然う人情が移る者でございませんが、巧い役者が致しますと、真に迫つて思はず涙を流します。勿論役者は其の役々に依て涙の出し所が違ふと申します。之は然うかも知れません。世話物を演ります時には、一寸拳固で水洟を擦つて、頤を持上げて、御客様に涙を溢させる場合もある。其れが宜いからと云つて、真逆にや金ピカの伊達社衿を着けた時に、手拭を鷲摑みにして、鼻面を擦つた日にやア御客様は泣かれません、中に又女形の涙などといふものは難かしい。ベソを掻いて目から涙を出すのは工合が悪いとか云ふので、早い話が六段目でおかるが身売りをする、勘平に出遇ふ時に夫婦の情で、勘平殿遣るものか

遣らぬものか、能う分別着けて下さんせいなアと、一寸額の所へ持つて居ります紙を宛がうと、モウ其れで泣いてるやうに見えますが、額から涙の出る奴はなからうと思ひます。然うかと思うと、奴の涙などは大体爪の先きから出ると云ひます。尤も芝居の善人は雨の降る晩に殺されると極つて居ります。後ろは竹矢来で、上下藪畳があつて、真中に老役の拵らへで赤合羽を着て柄袋を打つた大小、渋蛇の目を翳して足駄穿きといふので、合方に連れて、茲で御家に悪人蔓こりといふ台辞がある、所へ悪人が木蔭から出て来て、物をも云はず肩へ切り附ける、左の肩を切られたので右の肩を押さへる人があります。尤も左を切つ〈た〉から、今度右を切るだらうといふので、先きへ予防をするのかも知れない。何奴なれば声をも掛けず欺し討ちとは卑怯な奴、名を名乗れといふ。悪人の方では一太刀浴せて居るから、腹蔵なく名乗ります。冥途の土産に名乗つて聞かせる。満らないものを冥途の土産にする奴がある。ヤワカ汝の手に掛らうと、其れからヒヨロ〳〵手負で立上がりまして立廻りになり、鳴物が禅の勉めといふので、分らない話がある者でございます。後ろに寺もないやうだがチツテンチテヽン、チツテンデンと禅勉といふ鳴物で、悪人が寄つて集つて善人を殺して終つて、顔と顔を見合せて、フヽと笑ひます。怪しからん奴があるもので、人を殺して笑つて居ます。此方の方に居る男が、バタリ〳〵と附けを打ちます。之は悪人に頼まれて、見張りをして居るやうだ、誰か来たから早く逃げろといふ知らせでございます。此の音を聞くと悪人が木蔭へ忍んで終ふ。所へ奴が出て来ます。此の奴が又赤合羽に饅頭笠、提灯を提げて駈出して来る。バタ〳〵バタ〳〵と来たかと思ふと、旦那の死骸にボンと蹴附ける、途端に明火を消して終ふ。疎忽かしい奴があるもので、提灯を点てアノ位足元が悪いんだから、提灯がなければ、何所へ飛込むか訳が分らない。其から探つて来て、旦那の顔と奴の顔と等分に打附つたと思ふ時分に御月様が出ます。馬鹿気た話があるもので、旦那が殺される時は雨が降つて居りました。奴が探し物を初めたら急に御月様が出た。尤もアノ時の天気予報にも、多少の雨後に晴と出て居た。晴の方へ打附つた奴は間が好い。旦那の顔を見定めが着くと、ブーツと一つ咳を引掛けて、ボンと尻餅を搗く。少し身体を浮かして中腰になりまして、コリヤ御旦那でこわりまするかと、舌の廻らない年頃でもない癖に……今一足早くんば、斯く暗々と御最期はさせまいものを、無念の事をばいたしたなア……舌が廻らなくつて顫へてるから確かに中気だ。無念の事を致いたなアと、手を振つて指を顫はせ、指の先きから涙が出る。尤も指の先きにはツメといふ目があるから、涙が出る。余り的にはなりませんけれども……中に又宗吾の子別れなどと来ると、之も目から出ない、鼻から涙が出る。其れを捩断つては皆な膝へ擦り附けます。泣き方も種〻あつた者でございます。就中此の宗五郎の子別れと来ると嬢さん方は一層力を入れて御覧になつて目も何も泣き腫して在つしやる。中には髭の生えた逞ましい方などが、一心に之を見て在しつて、情に迫るから、ボロ〳〵涙を溢す。其れを拭きもしないで見て居りますから、髭へ滴が垂れる。

宛然鍾馗様が夕立に合つたやうな格好をして居る方がある。只今申す通りの仕義で、鼻から出る涙を捩断ては膝へ撫で附ける。二人の子供を傍へ引附けて、幼なけれども能く聞けよ。鳴物が雪の合方になつて、寂として来て、自然と引入れられるやうな気になります。父は大勢の者に成り代り、江戸表へ出て御直訴をしなければならぬが、其方等二人は存らへて、便り少ない母親に孝行頼むと、茲で少し顔を持上げて置いて、鼻を摘んでキユツと泣き、此つを捩断て来て膝の所へ擦りながら、コリヤ宗之助といふ。随分洒落た涙の出所がある者でございます。御芝居の中でも一番早分りのするのが忠臣蔵、何所へ参りましても、是ばかりは分る者と見えまして、田舎芝居でも素人芝居でも、大体此の忠臣蔵が出ます。勿論大芝居でも入のない時には忠臣蔵をやれといふ位。陰陽一幕毎に変りまして、誠に能く出来て居る狂言でございます。又田舎などへ参りますと、随分役者が寄り集まつて、役紛紜がして、俺はアノ役は何だとか彼だとか、勝手な事を云ふ者がある。中には又田舎の人で、地芝居などへ入つたり何かして、どうか今度は江戸の役者が来て、忠臣蔵をやるなら、其の中へ交つて何でも構はねえから、一役やりてえがなと、頭取を捕まへて彼是れ云つてる人もある。

頭取「モシ〳〵お前さんかえ、何か一役やりてえといふのは」

○「ヘエ、何でも構はねえでがすが、私もコレ芝居ではエラ評判の好い男でがすから、何でも一役演らして貰ひてえ者だ」

頭「然うさねえ、何か一役附けて上げたいが、何うだい五段目へ一役出るかえ」

○「五段目て何ういふ役でがすえ」

頭「儲かる役だ、独り舞台で」

○「ヘエー独り舞台といふと、何ういふ事をやるだね」

頭「五段目の猪だ」

○「ハテネ、人間ぢやねえのかね」

頭「人間ぢやアない」

○「ぢやア駄目だ、私も出るからには成るたけ白粉でも粧て綺麗な役をやつて見てえと思ふんで……」

頭「五段目でお前が猪を交際て呉れさへすれば、七段目になつて、お前に幇間でも仲居でも白粉を粧る綺麗な役をさせる」

○「然うでがすか、然んならハア五段目の猪になるべえ。けれども難かしかんべえ」

頭「大した事もないが、与市兵衛が殺されて終ふ。其処へお前が鳴物に連れて駈出せば宜いのだ」

○「ヘエー、猪になるのは何ういふ按排に……」

頭「サア之を着るのだ」

○「成程」

頭「モツト四這になつて……」

○「之は却々難かしいものだ。之で駈出すのかえ。転がつた日には鼻を突くね」

頭「転ばないやうに駈出すのだ」

○「却々六ケ敷いものだ。何でもハア物事は稽古が大事だといふ

から稽古やるべえ」
頭「其れが宜い、今大序が開いた所だ、無暗に諸方駈けて歩いては往けないよ」
○「大丈夫でがす。其ぢやアハア与市兵衛がおツ殺されて何といふ所で出るでがす」
頭「与市兵衛が殺されて、逸散に来る手負猪、テレツク〳〵テンテレツクといふ鳴物を聞いたら駈け出すんだ」
○「成程。其ぢやアハアテレツク〳〵テレテレツクといふ所で駈出せば宜いんで……」
頭「然うだ」
○「宜うごぜえます」
と、一番猪を巧くやつて見せやうと思ふから、縫ひぐるみを着たなり駈けて歩く。
頭「今大序の幕の開いたばかりの所だ、舞台へ駈出しちやア往けないよ」
○「大丈夫でがす」
　其中に二段目三段目と幕が進んで来る。ノベツに猪は楽屋中駈けて歩いてる。どうも蒼蠅こと。
△「頭取さん、小言を云はなくつちやア往かねえ。猪が諸方駈け歩いて弁当箱を蹴飛ばしたり、小道具部屋へ飛込んで、何か毀したりして困つちまう」
頭「オイ〳〵猪が然う楽屋を暴れて歩いては往ない……」
　其中に猪がスツカリ疲労て終つて、頭取部屋の柱に凭れてコクリ〳〵居眠りをして居る。
△「頭取さん、猪は何うしました」
頭「宜い按排に落着いたやうだ」
△「其れは剛義だ。成るだけ五段目の開くまでソーツと寝かして置いた方が宜い」
　のんきな猪があるもので、グウ〳〵寝込んで終つた。其の中に四段目となる。四段目は十二段の中でも一番難かしい幕で、五万三千石の大名が腹を切るのでございますから、芝居とは云へ、御客様の方でも静まり返つて神妙に見て居ります。頓ての事に弥〻腹切りになると、力弥御意を承まはりと、チョボに連れて、白木の三宝へ腹切刀を添へて、上使の前へ出る。宜しいといふ思ひ入りあつて判官の前へ力弥が三方を据る。デンといふ三味線で肌脱ぎになり、力弥々々由良之介は。未だ参上仕りません。又デンと来て、力弥々々由良之介は。揚幕の方へツ、と立つて、花道の附けへ坐つて、揚幕を見込んで、悄れて帰つて来まして、未だ参上仕つりません。存生中に対面せんで、残念ぢやと申して呉れよ。御検使御見届け下されい。之から膝試しがあつて、白木の三宝を後ろへやつて、愈〻腹へフツリ差込む。途端にバタ〳〵と由良之助の駈着け、茲が役者の見せ場でございます。此の時上使が、国家老大星由良之介とは其方か、苦しうない、近う〳〵、ハ、ア、腹帯を〆直して、デンといふ三味線で舞台へ掛る。跡に続いて一家中とチョボになつて、茲へ残らず出て参ります。田舎芝居の事で役者が足りないから、何でも手空の者は皆な出せといふので、

楽屋総出でございます。サア頭取は骨が折れる。「サア〳〵皆な出なくつては往けない。オーイ諸士の連中、諸士が出るのだ」と、大きな声をすると、居眠りをして居た猪が聞間違へて、「ハアモウ出るのでがすか」と揚幕の所へ来て見ると、楽屋総出で、誰も居ない。自分で揚幕を絞つてテレツクテレツクテンテレツクと口で囃子をしながら駈出した。驚ろいたの驚ろかないのではない。由良之介が判官の前へ手を付て十分思ひ入れを見せてる所へ、猪が駈出して来て、突然由良之介の肩へ駈上がつて、判官の横ツ面を蹴飛ばして、襖を打倒して、楽屋へ駈け込んで終つた。見物は大騒ぎ、悪落がしてガヤ〳〵ガヤ〳〵鳴りが静まりません。中には又強く感心して居る者がある。

甲「巧えものだ流石どうも江戸の役者だ。狂言が細けえ」

乙「馬鹿野郎何が狂言が細けえのだ」

甲「細けえぢやアねえか」

乙「馬鹿ア云へ、五段目に出る猪が四段目へ駈け出した。其れで何が細けえのだ。余まり下らねえ事をいふと他村の者に笑はれるぞ」

甲「他村の者も狂言が細けえと云つてまさア」

乙「何が細けえのだ」

甲「何がつて、五万三千石の殿様が腹ア切つたから、領分の猪が暇乞ひに来たゞんべえ……」

然うかと思ふと、御素人方が御集会になつて、芝居ごツこをおやりになると、随分可笑な者が出来上がります。新年宴会とか忘年会とか息子ちやんの御誕生祝ひ、或ひは又御隠居様の還暦の祝ひなどといふ時に、出入りの者も御呼ばれをして黙つては居られない。何れ余興か何かあるだらう。先方の余興を拝見するよりは、此方で皆な揃つて何か余興をやらうぢやアないかといふ話が極つて

甲「どうだえ芝居を一幕、御茶番だと悪巫山戯をして往けないから、大真面目に芝居を一幕出さうぢやアないか」

乙「其れは結構だね。狂言芸題はどういふ者をやるつもりだ」

甲「さうさねえ。どうも新物も冴えないし、大時代物になると、役者も入るし入費も掛つて、工合が悪いから、何でも各自に目に馴れたことをやつたら宜からう」

乙「目に馴れたことといふのは何だい」

甲「年中見て居るものならば、幾らか演り宜いだらうと思ふ」

乙「成程。年中見て居るものといふと……」

甲「先づ忠臣蔵が宜からう」

乙「忠臣蔵は一番宜いね」

甲「けれども大序、二段目、三段目、四段目までは何うも迚ても素人にはやり切れない」

乙「ぢやアやる処が無いぢやないか」

甲「其処がな、どうだい五段目から初めて六段目七段目と往つて、チョンといふ事にして、跡は御浄瑠璃か何か一つ出して貰う。御芝居でいふ所作事だね……」

乙「成程、其れは宜い処へ気が付いた。其ぢやア五六七と三幕出さう。処で五段目をやるなら、僕は是非一つ勘平になりたいと思

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com